

2019年度前期 授業改善アンケート集計結果に対する意見

—法学部—

法学部長 山本 輝之

授業評価の結果から何をどのように読み取り分析して、自己の授業における課題を発見し、今後の授業改善につなげていくかは、個々の教員の判断に委ねられていることは言うまでもない。

そのうえで、全体的な結果を見ると、「授業中、この授業の内容を理解するために努力した（ノートをとる等）」という項目の平均値が、昨年度後期（以下、「後期」）と同様に3点台（昨年度後期は3.94点、今年度前期（以下、「前期」）は3.69）に止まっており、しかも下がっているのは、気になるところである。また、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」という項目の平均値も、下がっている（後期は3.95点、前期は3.88）。さらに、「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」という項目の平均値も、若干ではあるが下降傾向にある（後期は4.10点、前期は4.03）。

今回の集計結果からは、以下のことが推測できるのではないと思われる。教員は、高度な科目内容を分かりやすく伝え、学生が理解できるよう様々な工夫・努力をされているが、それが必ずしも学生の、授業の内容を理解するための十分な努力を引き出すまでには繋がっておらず、そのため、授業のレベルが自分にとって適切だとは思えず、授業内容を有意義と感ずることができない学生が若干増えつつある、ということである。

教員の側でも以上のことを再度十分認識し、引き続き、学生の主体的・積極的な勉学意欲をより一層引き出すべく尽力していく所存である。

以上